



第52回「おかねの作文」コンクール

お金では買えない、本当の笑顔

静岡県・静岡市立安倍川中学校 2年 近藤 瑞歩

「もうちょっとだけ、お小遣いを上げてくれ。」

と、何も考えずに親に言ってしまった。中学2年生の僕のお小遣いは2,000円で、バイトができない中学生にとっては、2,000円という額では足りなかった。僕はその都度おじいちゃんに頼むのだが、年金で暮らしているおじいちゃんに申し訳なく、なるべくやめることにしたのだが、ピンチになると、どうしても頼ってしまった。

昔から衝動買いが自分の悪いクセで、そのため、なかなかお金が貯まらなかった。僕も何とか衝動買いをしないように、持っていくお金を少なくしたり、なるべくお金を使ってしまいそうな場所には行かないようにして、お金を貯めたのだが、すぐに全て使ってしまい結局また一からのリスタートとなってしまった。そうしてそれを何度も繰り返す内に頭にある考えが浮かんだ。それが月のお小遣いを上げてもらうというものだった。

そうして僕は親に言ったのだが、「駄目だ。少なくとも、自分の身の回りのこともしっかりやれず、自分の欲しいものがあれば、後先考えずに、すぐを買ってしまうんだったら、どんなに増やしても金の無駄だ。」と返された。いたって正論だ。それなのにその時の僕は、ついカッとなってしまう、「別に1,000円ぐらいなら増やしてもいいだろ。」と、あまりにもバカで、あまりにも無責任なことを言ってその場から逃げるようにして急いで自分の部屋に向かった。

……それから何時間たったのだろうか、やっぱりその日は寝つきが悪かった。数時間たって冷静になると僕は自分がやったことに、腹立った。「なんだよ、自分が好きなものを何も考えずに買って。それで、金が無くなったらじいちゃんにすがって、それでも足りなくなったら、お小遣いを上げろ。バカじゃないのか、俺は……」小声でそんな独り言を言っている内に僕の視界が歪み目から雫がこぼれ落ちた。そのまま僕はベッドの上で泣いてしまった。嫌だった。情け

ない自分が、いつまでも変わらない自分が、ずっとずっと嫌だった。静寂に包まれた空間に僕の^{おえつ}嗚咽が木霊する。

ちょうどその頃、コンッコンッと扉がノックされた。「起きてる？」その優しい声は母さんだった。母さんも今の僕を察してくれたのか、扉を開けはせず、その場で話してくれた。「あんまりお小遣い高くしてあげられなくて、ごめんね。お金に困ってるんでしょ？ここに置いとくからね。」そんな母の声は、涙ぐんでいて、ややくぐもっていた。

数分がたって扉を開けると、そこには、5,000円と一つのメモが置いてあった。そのメモには『生きた使い方をしてね』ただそれだけ書いてあった。また部屋に戻ると、急速にまぶたが熱を帯び涙が止まらなかった。ふと机の上にある鏡が目に入る。そこに映っていたのは、まるで、^{りんご}林檎のように顔が真っ赤に染まった自分だった。さすがにたくさん涙を流したせいで疲れたのか、すごい眠気に襲われた。僕は薄れゆく意識の中で、生きたお金の使い方を考えながら眠りについた……。

翌朝僕は目を覚ますと、急いで母さんの部屋の前に向かった。5,000円を握り締めて。トンットンッと扉をノックして母さんの部屋に入った。そして僕は5,000円を母に返した。その時の母の表情は、少し驚きながらも、優しく^{ほほえ}微笑んでいた。僕は今でも母のあの表情が脳裏に焼き付いている。あの笑顔はきっと、お金では買えない本当の笑みだった。お金を返すと僕は何も言わず、母の部屋を出た。

お金というのは人の生活を豊かにしてくれる。でもお金は、時に争いを生み、人を殺し人を崩壊させることができる、危険なものだ。お金は身の回りのものをほぼ全て買うことができる。でも、この世界にはきっとそれと同じぐらいお金では買えないものが存在する。愛情や友情、時間などの、具現化されていないものは、お金で買うことはできない。でも、それらは、お金で直接買うことはできなくてもそれらをもっと楽しく、もっと豊かにすることができるはずだ。僕はお金というものの価値は、自分ではない、他の人を笑顔にするために存在すると思っている。だからこそ、僕もいつか働いてお金を手に入れたら、他の人の笑顔のために、お金を使っていきたい。それが僕の“生きたお金の使い方”なのだから。